

James Wetzel, 'Will and Interiority in Augustine: Travels in an Unlikely Place',

*Augustinian Studies* 33:2 (2002) 139-160.

上村直樹

アウグスティヌス (= Aug.) 『告白録』第二巻での罪をめぐる探究から二つの倫理、一つは、罪の動機という神秘は暫定的であって最終的なものではないこと、もう一つは、暫定的な倫理は心理学の神学的な変容を見据えていること、この二点を抽きだし、狭義の心理学的な意志への接近を放棄する第七巻の解釈に取り入れようところみる著者は、Aug. の意志概念について近年もっとも影響をおよぼした A. Dihle, *The Theory of Will in Classical Antiquity*, 1982 への批判からその論述に着手する。Dihle によれば、人間は自分が知っていると考えているよいものを意志する必要はない。しかし、このような意志理解を延長すれば神の創造の意志はまったく恣意的となる。また、神の創造する意志と罪を欲すると Aug. が考えているもののあいだに Dihle が見いだすアナロギアは、神が無から創造することができるという力を有する一方で、人間が或るものをはじまりに据えなければならぬという差異が妥当とは見なされないゆえに、成立しがたい。そこで著者は voluntarism との結合を断ち、Aug. 本来の意志概念の神学的な複雑さを取りもどすことを企てる。意志の特徴と一般に考えられる arbitrariness は、Aug. にあっては罪を欲するときのみ（暫定的に）適用されるからである。Aug. の思考は、罪の動機に関する心理的な神秘が、罪の創造に関する神学的な神秘を枠づけるのではなく、逆に神学的な観点から意志の心理を構成することへと転換する。著者は、意志について神学的な概念を確定的に記述することはできないと主張する。とはいえ、神が欲するように意志することは Aug. の措定する意志の敗北ではない。それは真に完全な存在者が Aug. に求めることを受け入れることであり、物質主義的なパラダイムから離れつつ受肉の神秘を鏡をとおぼろに見ている人間の神との交わりを尋ねもとめることである。